

清水谷製錬所跡

今では緑の丘の中腹に静かに佇む石やコンクリートの塊にすぎない清水谷精錬所跡は、19世紀後半にここで再開されようとしていた銀生産が失敗に終わったことを物語っています。1886年に大阪の藤田組が石見銀山の採掘権を獲得したときには、この鉱山はすでに何十年にもわたって休眠状態となっていました。しかし藤田組は多額の投資を行い、既存の坑道を拡張して大量の鉱石を掘り出すためにダイナマイトを使用するなど、最先端の採掘設備と方法を導入しました。これら近代化の取り組みの末、1895年に清水谷地区に新しい精錬所が開設される運びとなりました。同精錬所では最新の技術を採用して、藤田組が近くの坑道で採掘した大量の鉱石を処理していました。

しかし、350年余りにわたって採掘されてきた石見銀山の銀鉱床はすでに枯渇しており、鉱石の質が予想よりも粗悪であることがわかりました。純銀を抽出するために使われた技術も期待を裏切ることとなったようで、最終的に清水谷精錬所はわずか一年半の操業の後、閉鎖されました。藤田組は、当時大日本帝国の一部であった台湾の九份など、自社の支配下にあった他の鉱山に精錬設備を移転することで、損失の削減を模索しました。清水谷精錬所の跡地は、変電所へと姿を変えましたが、その後の運命についてはほとんど知られていません。今でも残る基礎部分のみが、かつてこの施設が堂々たる規模であったことをほのめかしています。